

新聞記事にみる盛り場の歴史的変容

——第2次世界大戦後の鹿児島市天文館地区を事例に——

前屋敷 史子

I. はじめに

- (1) 研究目的
- (2) 研究方法

II. 対象地域と資料の概要

- (1) 天文館の概要
- (2) 資料と記事の分類結果

III. 〈出来事〉として捉えた天文館地区とその変容

- (1) 復興
- (2) 娯楽の場—映画館とダンスホールの隆盛—
- (3) 負のイメージ—暴力と混雑の街—
- (4) 近代化事業と負の部分の併存
- (5) 都会への志向

IV. おわりに

I. はじめに

- (1) 研究目的

盛り場に関する地理学的研究は、都市地理学や商業地理学の分野において、多くの成果が蓄積されてきた。これらの研究の中で「盛り場」とは、商業機能の集積が景観的に把握でき、かつ連続する店舗が組織を形成している「商店街」と、アミューズメント機能を有する業種が集積する「歓楽街」の混合が見られるところと定義されている¹⁾。そして、その分析では、業種構成や経営規模・形態、土地所有状況等を指標としている。このような分析も重要であることは否めない。しかし、盛り

場とは施設や商店が集積しているというだけでなく、人々が集い、交流し、享樂する空間でもある以上、従来のような分析だけでは不十分であろう。この考え方から研究を行った社会学者・吉見によれば、「『盛り場』とは、恒常的に多数の匿名的な人びとが盛っていること」²⁾ (=〈出来事〉³⁾)であり、「ある盛り場がそこに集った人びとによってどのように生きられ、そこでどんな社会関係が結ばれ、いかにしてその盛り場固有の集約的な気分が醸成されていったのか、といった点を問題にしていかなければならない」⁴⁾という彼の指摘は重要である。

地理学分野でも、この吉見の指摘に触発された山田⁵⁾や山近⁶⁾などの研究もあらわれている。これらの〈出来事〉として盛り場を捉える研究の対象地域は、首都圏や広域中心都市がほとんどであり（例えば、吉見は東京の盛り場を、山田は名古屋大須、山近は京都新京極を対象としている）、管見の限りでは地方都市を対象とした研究は見られない。そこで、本稿では、地方都市・鹿児島市の盛り場である天文館を〈出来事〉として捉え、その歴史的変容を追っていく。幕末・明治から第2次世界大戦までの天文館の歴史については、唐鎌の著書⁷⁾においてすでに言及されているので、本稿での対象時期は、まだ、その歴史的変容が研究されていない第2次世界大戦後とする。

- (2) 研究方法

盛り場を〈出来事〉として捉えていこうとする際に、どのような資料を使用するかが問題となる。従来盛り場研究に用いられてきた統計や地図などからだけでは、〈出来事〉を十分に読み取ることは困難である。文学作品から読み取るという方法も考えられるが、本稿では、より大衆的で、市民が日常的に接しているメディアである新聞（雑誌）記事を主に使用して分析を行う。

ところで、新聞に掲載される記事は、非日常の、一部分の〈出来事〉であるという限界も無視できない事実である。しかし、特集記事や街の描写をするような記事は、その時の盛り場の〈出来事〉を描いていると考えられる。さらに、記事は書き手の一方的な産物ではなく、読み手（＝盛り場に多かれ少なかれ関わる人々）の需要に応じており、読み手の持つ社会的な意識を反映しているのである。

よって、盛り場を〈出来事〉として捉え、その歴史の変容を追っていくために、新聞記事を分析資料とすることは、有効であると考えられる。

II. 対象地域と資料の概要

本章では、第2次世界大戦後の天文館の歴史の変容を追う前に、戦前の天文館について、簡単にその歴史の変容を述べる。さらに、使用する資料について、その概要を述べる。

(1) 天文館の概要

天文館は鹿児島市街の中心部にあり、近代以降、天文館およびその周辺には商業、金融、行政等の施設が集中している。「天文館」の名は、安永8（1779）年に島津重豪の設立した天文・暦学研究所（明時館）に由来する。「天文館」は通称で、行政上の地名としては存在

しないが、「天文館通り」は存在する。ただし、鹿児島の人々が「天文館」といった場合、「天文館通り」だけを指すのではないので、「天文館通り」と「天文館」は区別しなければならない。以降、本稿では「天文館通り」と区別するために、引用部分を除いて「天文館」の範囲のことを「天文館地区」とする⁸⁾。「天文館」は通称地名なので、「天文館地区」に明確な範囲があるわけではないが、本稿においては図1のような範囲とする。また、天文館地区には多くの通りの名前があるが、その位置についても図1を参照していただきたい。

明時館が設立される前の安永2（1773）年に、現在の朝日通りと金生通りの交差点に、

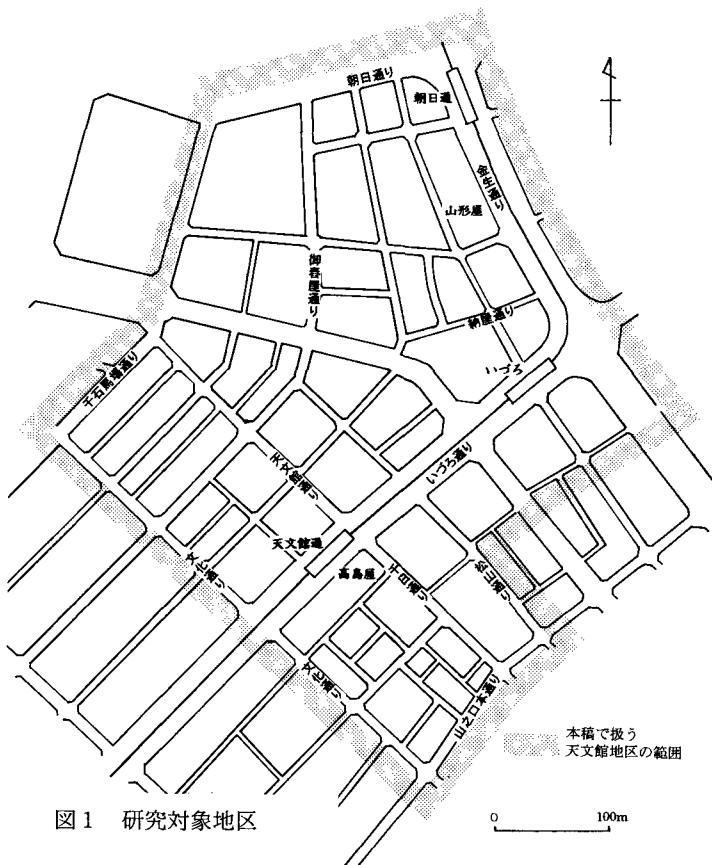


図1 研究対象地区

表1 『南日本新聞』における天文館地区関連記事の分類結果

記事の内容	昭和20-29 (1945-54)	昭和30-39 (1955-64)	昭和40-49 (1965-74)	昭和50-59 (1975-84)	昭和60-平成7 (1985-95)	計
街に関する話題	49	37	59	84	83	312
人に関する話題	1	0	0	1	2	4
事件	2	2	2	0	0	6
分類不能	0	3	0	0	0	3
合 計	52	42	61	85	85	325

火除地として広小路が設けられた。そこに日店(屋台店)や行商人が集まったことに、天文館地区の繁華街としての起源がある。また、前ヶ浜港(現在の鹿児島港にあたる)の荷揚地としても繁栄していた。ただし、まだその頃は、まわりに多くの武家屋敷が並んでいた。明治維新によって武家屋敷地が分割されたことにより、天文館地区は大きく繁栄することになった。

明治11年には、天文館地区の御春屋(おつきや)通りに真宗本願寺鹿児島別院がつくられ、本願寺に参拝するために、遠方からも多くの人々が集まり、周辺には料理屋が並んでいた。明治30年の『鹿児島市街実地踏査図』(蓑田岩太郎作、鹿児島県立図書館所蔵)には、芳野屋と池田屋という2つの料理屋が描か

れている。

また、明治13年に鹿児島授産場ができた後、天文館地区には御春屋通りと石灯籠(いづろ)通りの2ヶ所に、勸工場が作られた。

大正時代に入ると、天文館地区(特に天文館通り)には、劇場・映画館やカフェーが集中する。大正10年の『鹿児島市街地図』(大淵善吉作、鹿児島県立図書館所蔵)を見ると、天文館地区には世界館・天文館・中座・明治座・喜楽館・帝国館・鹿児島座の7つの劇場が描かれている。

しかし、繁栄していた天文館地区も、昭和20年6月17日の鹿児島大空襲により、全焼してしまう。

(2) 資料と記事の分類結果

表2 キーワード別にみた天文館地区の「街に関する話題」記事数

キーワード	昭和20-29 (1945-54)	昭和30-39 (1955-64)	昭和40-49 (1965-74)	昭和50-59 (1975-84)	昭和60-平成7 (1985-95)	合計
復興・開市	15	0	0	0	0	15
料理屋・食堂・喫茶店	7	2	0	0	0	9
映画館(映画)・劇場	13	2	2	1	2	20
ダンスホール	4	0	0	0	0	4
商店街	0	12	11	14	13	50
デパート	1	1	2	3	2	9
暴力・売春	0	7	3	2	15	27
露店	1	1	5	0	0	7
混雑・汚い	0	3	7	0	0	10
アーケード・モール	1	6	12	20	15	54
街路舗装	0	0	5	7	6	18
街灯・照明・ネオン	1	2	0	1	0	4
商業近代化	0	0	0	3	3	6
高額飲食代・客引き	0	0	0	14	0	14
その他	3	3	9	5	3	23
合 計	46	39	56	70	59	270

注：記事によってはキーワードとなるものがない記事や、複数のキーワードが含まれる記事もあるため、表1の件数とは一致しない。

資料として使用した新聞は『南日本新聞』である。南日本新聞は、鹿児島県全域及び宮崎県南部を購読圏とする地方新聞である。昭和17年に鹿児島新聞と鹿児島朝日新聞（旧鹿児島実業新聞）が合併し鹿児島日報となったものが、昭和20年に南日本新聞と改称した。戦後常に、県下で最も購読者数が多い鹿児島県最大の新聞である。

南日本新聞の掲載記事の中から、まず、内容にこだわらず、天文館地区に関する記事を収集した結果、325件の記事が検索された。次に、この325件の記事を表1のように分類した。表1から分かるように、すべての時期を通じて、記事のほとんどが街に関する話題であり、その中でも流行や世相を描いたものが多い。

「街に関する話題」の記事については、その記事のキーワードを抜き出して集計し、表2のような結果が得られた。それを見ると、昭和20-29（1945-54）年は復興・闇市をキーワードとする記事とともに、映画館やダンスホールなどの娯楽に関する話題が多くを占めている。昭和30（1955）年以降になると、娯楽をキーワードとする話題は減少し、商店街の話題を扱うものが増えている。それとともに、昭和30（1955）年以降、暴力や売春のような暗い部分をクローズアップする記事や、街の混雑や汚さをキーワードとする記事の掲載が増加している。一方、同時期に、ハード面の整備についての記事も増えていることが分かる。アーケードについての記事は昭和30（1955）年以降、街路舗装については昭和40（1965）年以降、記事数が増加している。また、昭和50（1975）年以降は、代わりに商業近代化をキーワードとする記事が見られる。

以上の分類結果をもとに、III章では盛り場・天文館地区の変容を、新聞記事を引用しながら記述する。

III. 〈出来事〉として捉えた天文館地区とその変容

(1) 復興

終戦を迎えると、間もなく、天文館地区にも闇市が形成された。表2をみると、戦後10年間は復興をキーワードとする記事が、街に関する話題のうち約3分の1を占めていることが分かる。

闇市場は、納屋通りに自然発生的に成立し、板や布を地面に敷いて、塩、手製たばこ、黒砂糖、ろうそく、雑穀などが雑然と並べられて売られていたという⁹⁾。また、昭和21年の南日本新聞には、闇市場では、洋服、シャツ、靴などの商品を売る店のほかに、「おでん屋」や「しるこ屋」もあったことが書かれている¹⁰⁾。このように、様々なものが売られることで、「闇市場の魅力はますます大きくな」¹¹⁾っていった。

昭和21年5月には鹿児島復興都市計画街路および土地区画整理事業が決定され、鹿児島市街の復興土地区画整理事業がスタートする¹²⁾。

順調に進む復興の様子を、昭和21年9月の南日本新聞は次のように報じている。

鹿児島島の銀座“天文館通り”も戦災のため、すっかりその面影を失ってゐたが、やうやく復興の足取りをはやめ、今ではバラック建てながら十*におよぶ食堂をはじめ書店、雑貨店などが立ちならびおひおひ昔の賑ひを取り戻してゐる。¹³⁾(*は判読不能。以下同じ)

そして、このような状況の中、闇市は、フリーマーケットや組織的市场に、また、路上の店からバラック立ての店へと姿を変えつつも、繁栄していく。昭和23年5月の南日本新聞によると、闇市から再出発した納屋通り付近には、バラック建築がひしめき合うように立ち並んでいた¹⁴⁾。昭和26年の天文館地区には、自治班・名山堀・納屋・ビックリ市・照国市・

山之口・千石という名称の7つの市場があり、その組合員は合せて約500名であった¹⁵⁾。

バラック街が作られる一方で、近代的な建築も作られていく。昭和22年5月の南日本新聞によると、天文館地区にはレストランやキャバレー、ダンスホールなどの近代建築が立ち並ぶようになり、「この街はまさに歓楽のパラダイスであり、新生かごしまの心臓でもある」¹⁶⁾というほどまでに復興している。

さらに、昭和23年5月の南日本新聞は、バラック作りの食堂がカフェへと変わっていき、天文館地区には40軒余りのカフェがあると伝えている¹⁷⁾。それらのカフェでは「ジャズレコードをガンガン鳴らしパンパン上がりの若い娘をおいて」¹⁸⁾いたという。

そして、その頃の天文館地区の様子について、昭和24年3月の南日本新聞は次のように伝えている。

復興カゴシマの息吹きをズカに感ずる天文館も、すっかり昔におとらぬアデ姿に化粧*れて路ゆく人々の足どりを吸いこんでいる。しかもアラモードの源泉といわれるだけに相もかわらぬ賑わいを呈しまた移りかわる世相の波はここにもひたひたと押しよせてデカダンな快楽を追う人たちの群れがエチケツトを身にたどるステップも鮮やかだ。¹⁹⁾

以上のように、闇市から再出発した天文館地区は、復興が進むにつれて人々をひきつけ、世相や流行が反映される街となっていったことが分かる。

(2) 娯楽の場

—映画館とダンスホールの隆盛—

復興の最中、市民の娯楽といえば、映画とダンスホールであった。このことは、表2の昭和20-29(1945-54)年における映画館、ダンスホールの記事数からもうかがえる。昭和20年9月、山形屋(デパート)は焼け残ったデパートの三階に映画場を開設し²⁰⁾、その異常な人気

ぶりは次のように伝えられている。

ならばもならんだり山形屋三階の第一映画場をはみ出た観客は二階の*場をぐるりと回って一階にのび出るといふまさに殺人的な**階段を降りることも登ることもできないありさまである。²¹⁾

このような人気を受けて、昭和21年には、二千名収容の第一映画館や、文化劇場、日東映画館、鹿児島映画劇場が建築されていることを南日本新聞が伝えている²²⁾。多くの映画館ができたことで、天文館地区は人々が集まり、ますます繁栄していった。その賑わいぶりが、昭和21年10月の南日本新聞に次のように描写されている。

天文館一帯の人波は昔におとらぬ賑わいをみせ観覧できずにすごすごと帰るもの、せっかくの休みの一日を映画で楽しもうと思ひながらあきらめて帰るアベックの波など数多くみうけられ、天文館再現の感があつた。²³⁾

一方、ダンスホールは、昭和20年12月に進駐軍専用ダンスホールが山形屋に開設され、昭和21年12月に進駐軍の引き揚げを機に、一般に公開された²⁴⁾。昭和21年12月の南日本新聞によると、山形屋ダンスホールはむせるような混雑ぶりであり、1枚3円のダンスホールチケットはブローカー、闇屋から飛ぶように売っていたという²⁵⁾。その後、昭和23年11月には、高島屋(デパート)にもダンスホールがオープンした²⁶⁾。さらに、昭和23年11月の南日本新聞の記事にもあるように、ダンス教習所も繁盛しており、これは「ダンスの大衆化をもの語っている」²⁷⁾といえよう。

これらの記事の分析から、モノと娯楽を求めて、天文館地区にはたくさんの人々が集まり、繁栄していたことが分かる。

(3) 負のイメージ—暴力と混雑の街—

市民の娯楽の場として復興していった一方で、天文館地区は暴力団や非行少年の溜まり

場となり、危険な街という認識が強くなっていった。また、露店による混雑、ゴミが溢れる街という汚いイメージも強くなる。このことは、表2の暴力、混雑のキーワード件数が、昭和30年代以降、増加したことから分かる。

昭和33年8月の南日本新聞によると、天文館地区には「サングラス姿のグレン隊」が「善良な市民に街角でスゴ味をきかせ」ていた²⁸⁾。昭和43年の南日本新聞の記事では、天文館地区に万引きや恐喝などの犯罪が集中していることを報じている²⁹⁾。

犯罪だけではなく、押売り行為も集中して起こっていた。昭和33年の南日本新聞の記事には、天文館地区に、観光客や田舎から来た人をねらい、不当な値段で写真を無理やり撮る街頭写真屋が大勢いることが伝えられている³⁰⁾。

昭和50年代に入ると、天文館地区には県外資本によるピンクサロンが増加し、「通行人に対する強引な客引き行為が目立」³¹⁾つようになる。その様子が、昭和53年の南日本新聞に次のように描かれている。

二、三人の呼び込みを迷惑そうに避けて通る通行人も多い。なかにはその前に立ちただかり、腕を引っ張りひわいな言葉を吐く。(中略)チラシを受け取らない通行人には悪態をつく。不愉快な客引き行為は天下の公道であたり前のごとく行われ、ここでも取り締まりの間げきをぬって、エスカレートの様相をみせている。³²⁾

このように、戦後の天文館地区は「中心地区で娯楽と非行がとなり合わせしている感じで」³³⁾あったのである。

さらに、昭和40年の南日本新聞の記事を見ると、天文館地区の道路には露天商の屋台(昭和43年の記事によると、これらの屋台ではホットドッグ、うどん、そば、しんこ団子が売られていた³⁴⁾)や果物・野菜売りのリヤカーが無秩序に並び、歩行者の通行を妨げ、混雑していたことが分かる³⁵⁾。ただし、昭和43年の記事

によると、「こうした問題をよそに、リヤカーのくだもの販売はかなり繁盛している」³⁶⁾たという。

また、天文館地区は多くの飲食店が集まる反面、そこから出されるゴミのために、汚い街になっていった。昭和43年の南日本新聞に掲載された、ゴミ収集の実態調査によると、飲食店から出されたゴミが異臭を放ち、野犬が食い散らかしていたらしい³⁷⁾。この記事の4年前には、次のような投書が掲載されている。

電車通りの歩道の数カ所にそなえつけられたチリ箱からはみ出したチリが山と積まれています。この一帯は食堂、酒場などが集中しているだけにチリの量も多いようです。(中略)チリの山をながめるたびに心がくらくらくなってきます。(中略)またチリを無神経に町の表通りに投げずてる市民の気持ちが分かりません。³⁸⁾

前節で述べたように、人々は娯楽を求めて天文館地区に集まっていたが、それと同時に、危険で雑然とした雰囲気をも感じ取っていたことが読み取れる。天文館地区の繁栄と、これらの負のイメージは表裏一体のものであることが分かる。

(4) 近代化事業と負の部分の併存

前述のように、負のイメージをあわせ持つようになった天文館地区であるが、それらを一新しようとする近代化事業が次々と行われた。表2を見ると、暴力や混雑をキーワードとする記事が昭和50(1975)年以降減少したのにかわり、商業近代化をキーワードとする記事があらわれていることが分かる。また、ハード面の整備に関して、アーケードをキーワードとする記事が昭和30(1955)以降、街路舗装をキーワードとする記事が昭和40(1965)年以降、増加していることも分かる。

昭和49年に鹿児島市は中小企業庁の商業近代化モデル地域に指定される。この計画の中で、天文館地区は鹿児島市のシンボルゾーン

であり、専門店、高級品店を中心とした広域型の商店街を指向する街と位置づけられている³⁹⁾。

近代化の一環として、天文館地区では次々にアーケードや舗装街路が整備されている。アーケードや舗装は、近代化や集客の起爆剤のように捉えられていた。少し時期が遡るが、昭和28年、納屋通りに戦後鹿児島で初のアーケードが作られ、その時のアーケード完成を伝える南日本新聞の記事で、「鹿児島市の観光面にも異彩をはなつ新名所となろう」⁴⁰⁾と報じられている。

また、街路舗装については、昭和33年の週刊朝日の記事によると「天文館通りも賑やかになったが、うっかり歩けばデコボコに足をとられる通り」⁴¹⁾であった。昭和50年に天文館通りのカラー舗装が行われたが、それは「寂れる天文館繁華街の再興を」との機運が盛り上が⁴²⁾ったためであると報じられている。このことから、ハード面の整備が、商店街の活性化の手段として考えられていたことが分かる。

アーケードのある街の様子が、昭和50年の南日本新聞に次のように伝えられている。

家で退屈を持て余した家族連れや若者たちで天文館はごった返す。アーケード内を遠目に見ると、入れる余地があるか、と思うほど。この中を若者がハイセンスな服を身につけ、宇宙遊泳みたいにうまく人の間をすり抜けていく。(中略)天文館は流行を映す鏡であるだけでなく、おしゃれを磨くところでもある。⁴³⁾

アーケードという装置によって近代的な雰囲気を作り出され、人々はそので流行に乗った自分を演じていたといえる。

天文館地区の商店街は、近代化事業をもとに統一されたきれいな街へと変わっていくが、負のイメージが消えたわけではない。昭和59年の南日本新聞の記事によると、天文館地区にはピンクサロン10店、個室ピンクマッサー

ジ6店、特殊浴場1店、その他に実態のつかめないデートクラブがあった⁴⁴⁾。

このように、天文館地区が近代的な商店街に変わっていくのと同時に、歓楽街も繁栄しており、「天文館は夜と昼の顔を併せ持」⁴⁵⁾っていた。商業近代化事業は、ハード面の整備を行い、街の負の部分をなくそうという方向を作り出した。しかし、負の部分は消えず、それどころか、もう一つの顔としてさらに繁栄していることが分かる。

(5) 都会への志向

アーケード等によって近代的に演出された天文館地区であるが、記事の内容を読むと、そこには、一貫して都会への志向が見られる。例えば、時期は少し遡るが、昭和30年代の南日本新聞には、既に次のような記事がある。

鹿児島にこの種の喫茶店(ムード喫茶)がおめみえしたのは三年ほど前から。天文館通りのT喫茶が先ベンをつけた。主人が東京や大阪の先進地?を見てまわって、ホノ暗いフンイ気をいち早く移入した。冷房機も備えつけた。しのぎやすくなって変わってるといって新しがり屋の“天ブラ族”をひきつけた。⁴⁶⁾(引用文中の括弧内は筆者注)

そこには、若者から中高年者までが集まり、「多彩な現代鹿児島人たちの風俗博覧会場でもあった」⁴⁷⁾という。様々な世代の人々が、都会人を演じるために、都会の雰囲気を持つ天文館地区に集まってきたことが分かる。

ところが、初めは個性を出すための都会志向であったものが、昭和50年代になると、次第に街の個性が失われているという声が出てくる。昭和51年の南日本新聞の記事に東京出身の鹿児島在住者の天文館地区に対するイメージが記されているが、それによると、天文館地区は「ミニ化した俗っぽい東京の盛り場風」「ローカル・カラーがない」「オリジナリティが欠如」「リトル東京」⁴⁸⁾と評されてい

る。都会の雰囲気を出すために、天文館地区独自のカラーが不明瞭になっていったと受け取る人々もいたことが分かる。

IV. おわりに

本稿では、鹿児島市の盛り場天文館地区を新聞記事にあらわれた〈出来事〉として捉え、その変容を追っていくことを試みた。この試みにより、統計や地図などの資料では描くことのできない、新聞記事であるからこそ描くことのできる、盛り場の〈出来事〉を捉えていくことができた。

この分析によって明らかになったことを以下にまとめる。

①第二次世界大戦後、闇市から再出発した天文館地区は、復興の活気が溢れ、それとともに、映画やダンスホールなどの娯楽が人々をひきつけ、賑わっていた。

②昭和30年以降、無秩序な露店によって混雑していること、犯罪の温床となっていることが問題視されるが、それは盛り場の繁栄と背中合わせであった。

③昭和50年代になると、商業近代化事業が実施され、ハード面の整備が行なわれ、負の部分の払拭しようとするが、負の部分は併存していく。

④地方都市の盛り場には、都会への志向が存在している。

本研究では、新聞記事をもとに、盛り場を〈出来事〉として捉えてきたわけであるが、新聞記事にあらわれる〈出来事〉は、盛り場の全ての〈出来事〉の中のほんの一部分にすぎないという限界もある。盛り場を〈出来事〉として捉えるという視点で歴史的変容を追うためには、新聞記事だけでは十分とはいえないであろう。〈出来事〉をよりリアルに捉えるために、他にどのような資料があり(例えば、映像資料や日記、聞き取りなどが考えられる)、それらをどう活用していくかが今後の課題として残されている。

(お茶の水女子大学・院)

〔注〕

- 1) 盛り場に関する地理学分野の先行研究として、桑島勝雄(1964):業種構成からみた都心商店街の発展過程,地理学評論,37-12,23~34頁,今朝洞重美(1958):東京における繁華街地区の地理学的考察,地理学評論,31-12,32~52頁,杉村暢二(1988):『都市商業調査法』大明堂,215頁,服部銈二郎(1977):『都市と盛り場』同友館,240頁などがある。
- 2) 吉見俊哉(1987):『都市のドラマツルギー』弘文堂,24頁。
- 3) 〈出来事〉とは、戦争などの歴史的イベントだけではなく、人々の日常生活において起こる些細なイベントをも含む。例えば、街路での語りや居酒屋でのどんちゃん騒ぎや休日の買い物なども〈出来事〉である。
- 4) 前掲2) 24頁。
- 5) 山田朋子(1994):盛り場に住む人々にとっての「近代化」—大正・昭和初期の名古屋大須—,待兼山論叢,28,31~46頁。
山田朋子(1997):名古屋大須の盛り場構想の変遷—昭和初期の新聞座談会の役割—,日本学報,16,159~173頁。
- 6) 山近博義(1996):文学作品にみられる近代盛り場—明治・大正期の京都新京極の場合—,地理学報,31,17~34頁。
- 7) 唐鎌祐祥(1992):『天文館の歴史—終戦までの歩み—』春苑堂,239頁。
- 8) 唐鎌は、「北は千石馬場,南は山之口本通りに、西は文化通り,東は松山通りに囲まれた区画」としている。前掲7)。
- 9) 南日本新聞。昭和49年11月2日。この記事は戦後の天文館地区を回顧して書かれた記事であり、特異なケースであるが、その時期の天文館地区を知っている人が過去の記事や記憶をもとに書いた記事であるので、当時の状況を描いているものとして引用した。なお、表2のキーワード別の分類では、過去を回顧する特殊な記事であるので、「その他」に分類した。
- 10) 南日本新聞。昭和21年1月15日。
- 11) 南日本新聞。昭和21年1月15日。
- 12) 鹿児島市建設部(1965):『戦災復興誌』68頁。
- 13) 南日本新聞。昭和21年9月11日。

- 14) 南日本新聞。昭和23年5月23日。
- 15) 鈴木公(1951)：鹿児島市に於ける戦後のマーケット，鹿児島県地理学会記要，2号，27頁。
- 16) 南日本新聞。昭和22年5月21日。
- 17) 南日本新聞。昭和23年5月23日。
- 18) 南日本新聞。昭和23年5月23日。
- 19) 南日本新聞。昭和24年3月5日。
- 20) 山形屋(1968)：『山形屋二百十七年』324～325頁。
- 21) 南日本新聞。昭和21年1月15日。
- 22) 南日本新聞。昭和21年9月11日。
- 23) 南日本新聞。昭和21年10月9日。
- 24) 前掲20) 324～325頁。
- 25) 南日本新聞。昭和21年12月13日。
- 26) 南日本新聞。昭和23年11月9日。
- 27) 南日本新聞。昭和23年11月9日。
- 28) 南日本新聞。昭和33年8月19日。
- 29) 南日本新聞。昭和43年10月25日。
- 30) 南日本新聞。昭和33年8月25日。
- 31) 南日本新聞。昭和53年9月22日。
- 32) 南日本新聞。昭和53年10月11日。
- 33) 南日本新聞。昭和43年10月25日。
- 34) 南日本新聞。昭和43年5月18日。
- 35) 南日本新聞。昭和40年6月3日。
- 36) 南日本新聞。昭和43年1月29日。
- 37) 南日本新聞。昭和43年6月18日。
- 38) 南日本新聞。昭和39年2月21日。
- 39) 鹿児島商工会議所(1984)：『鹿児島商工会議所百年史』395頁。
- 40) 南日本新聞。昭和28年12月18日。
- 41) 週刊朝日，1958年1月5日号，114頁。
- 42) 南日本新聞。昭和50年12月2日。
- 43) 南日本新聞。昭和50年12月2日夕刊。
- 44) 南日本新聞。昭和59年10月13日夕刊。
- 45) 南日本新聞。平成元年5月25日。
- 46) 南日本新聞。昭和33年3月20日。
- 47) 南日本新聞。昭和33年3月20日。
- 48) 南日本新聞。昭和51年8月26日。

〔付記〕

本稿は，お茶の水女子大学に1995年度提出した卒業論文に，加筆・修正を加えたものである。新聞記事の検索・閲覧にあたっては，鹿児島県立図書館および南日本新聞社の方々に大変お世話になった。紙面をお借りして深謝致します。